

田能村竹田の山水画における「黄鶴山樵法」による作画について

宗像 晋作（出光美術館）

豊後国岡藩に生を享けた文人画家・田能村竹田（1777～1835）は、文化 8 年（1811）に藩内で起こった農民一揆に際し、藩政に対する失望の念を抱き、文化 10 年（1813）37 歳にして藩職を辞した。終生、岡藩に住居を構えながらも、頻繁に豊後と京坂を往復し、頼山陽（1780～1832）をはじめとした文人との交友を深めつつ画家として成長し、晩年にあたる天保期には、明浄な色彩と、細線を丁寧に取り重ねる繊細な筆致によって、清澄で気品漂う独自の画境を切り拓いている。

竹田の画業におけるターニングポイントは、文政 9 年（1826）から翌年にかけての長崎遊学であった。竹田は同地でみた舶載明清画の技巧にショックを受けたようだが、この体験は独自の画風を本格的に模索しはじめる契機となっている。竹田の山水画について、佐々木剛三、宗像健一、河野元昭、黒田泰三ら先学が指摘するように、この長崎遊学以降、实景を意識した山水画を制作する傾向が顕著となる。例えば、文政 12 年（1829）の「船窓小戯帖」や「目撃佳趣画冊」などの旅のスケッチ帖とでもいうべき画帖作品は、竹田の作画が自然の中での実体験に基づくものであることを明確に示すものであり、こうした作画姿勢は、天保期に入っていよいよ本格的に大画面の山水画にも試みられるようになっていった。

实景に目を向ける一方で、竹田が文政末～天保期の作画において傾倒を示したのは、黄鶴山樵と号した中国元末の画家・王蒙の画法であった。竹田の画論『山中人饒舌』や、絵画制作について語った書簡資料などによれば、竹田は中国画などに学んで古法を踏まえることが大切であることを強調しており、その上で独自の画趣を出すことを理想としていた。しかし、王蒙画の真蹟など見ることができなかった当時の状況を考慮すると、明清画の倣古山水や『芥子園画伝』などの画譜から竹田なりの王蒙画のイメージを創り上げていったと考えられる。この王蒙画法による山水画を本格的に描き始めたのが、实景を意識し、実体験に基づく山水画を描き始めるのとはほぼ同時期であったことは、古典を踏まえた上で新たな創造を目した竹田の作画理念に適う画風展開として受けとめることができるだろう。

以上のことを踏まえ、本発表においては、文政末～天保期に制作された竹田の「黄鶴山樵法」による山水画を取り上げ ①竹田の理解による王蒙画法について ②王蒙画法による真景図の成立とその意義 ③王蒙画法の昇華としての「松巒古寺図」の成立について という三つの論点を中心に考察する。そして、天保期の竹田画の一つの重要な側面が、現実の記憶と中国古典イメージとの間を自由に往き来することができるかのような画世界の創出であったことを、一連の王蒙画法による山水画の展開に則しながら明らかにしたい。